

次回企画展予告

第21回企画展

「1982~1988 新収蔵品展」

会期：平成元年4月1日(土)～5月7日(日)

会場：当館企画展示室

■「1982~1988 新収蔵品展」

昭和57年11月6日の開館以来今日、7年有余が経過いたしました。この間、当館は美術館活動として常設展を中心に特別・企画展を活発に行なう一方、東洋陶磁に関する図書(文献)を幅広く購入して参りました。また、国内のみならず海外の研究者とも学術交流を深めてきました。更に、美術館の最も基本的な活動である美術品の収集についても限られた予算の中で鋭意つとめて参りました。

今度の企画展は、この間に新収蔵品となった寄贈品と購入品とを合わせ一堂に展示し、披露しようとするものです。寄贈品につきましては、7人のご所蔵者の方々から貴重な愛蔵品をご寄贈頂いたものです。中国陶磁では、重文の元・青花牡丹唐草文盤と明・青花雲龍文梅瓶、「春寿」銘の二点を束焼謙三様よりご寄贈を受け、井上虎之助様よりは明・三彩龍文壺(「大明萬曆年製」銘)を、住友銀行よりは清・茶葉末双耳方形瓶、「大清乾隆年製」銘をご寄贈頂きました。朝鮮陶磁では、李朝陶磁の最高傑作の一つと言われている青花辰砂蓮花文壺と鉄砂虎皮文壺の二点を安宅英一様より、三匡・繩蓆文壺と高麗・無釉陶素文梅瓶の二点を卯里欣侍様より、また、粉青沙器象嵌牡丹文碗他二点を篠田博之様よりご寄贈頂きました。更に、八木正隆様よりは朝鮮陶磁の研究には欠かせぬ高麗及び李朝陶磁片41点をご寄贈頂きました。上記の作品は、館蔵品の質と量を高める名品であるばかりか、世界的な観点からみても光り輝く作品です。

振り返りますと、寄贈品の重みに改めて感謝の念が湧き上がつて参ります。

同展では、以上の寄贈品52点と購入品181点の計233点の新収蔵品の中から約50~60点を選んで展示します。既に特別・企画展で出陳したものもあり、一部割愛して展示することをお断わり申上げます。(K)



次々回企画展予告

特別企画展「洛中の新発掘品と伝世の名品 桃山の茶陶展」

会期：平成元年5月16日(火)～6月18日(日)

近年、京都市街地で道路工事の改修、地下鉄の建設、新旧建物の建替え等に伴って、古墳から江戸時代にかけての遺物が各地の遺跡から多数発掘されている。中でも桃山時代の茶陶については、今日伝来する名品と寸分違わぬ類品が多く発掘され、専門家のみならず愛陶家の間で注目をひくところとなっている。

これ迄の茶陶の研究は、専ら伝世品と茶の湯の歴史を中心にして進んできたと言える。この度とり上げる中京区弁慶石町を始め18遺跡からの出土品は、当時の人々が使用していた焼物でそこには当時の人々の好みが反映されている。従って窯址の陶片と違ってそれらは伝世の桃山茶陶との接点をもつもので、茶陶の研究には欠くことの出来ない重要な新資料と言える。同展では、それを茶の湯で用いられた伝世の名品と併せ展示することによって、桃山の茶陶の陶芸史における位置を明らかにしようとするものである。

尚、同展は東京・根津美術館、日本経済新聞社と共に開催する。(K)

出品物：伝世品 61点 (重文を含む)

発掘完形品 139点

陶片 19件



お知らせ

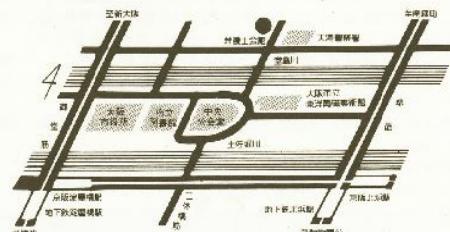
第13回講演会を下記の如く開催致します。

日時：平成元年6月3日(火)

午後1時半～午後3時半

場所：大阪弁護士会館 6階大会議室

講師：東京国立博物館 次長 林屋晴三氏



編集後記

1月の半ば、シカゴ美術館から105点の美術品が飛行機3便で次々と到着しました。3便に分けたのは輸送中の危険を分散する為です。英国でユナイテッド航空機の墜落事故があつたりして心配しましたが、無事到着。展示室にすらりと並んだ作品を見て、東洋部長の袁博士も当館の館長も準備段階でのいろいろな苦労を思い出したのが感無量のおももちでした。(O)

1989年3月15日発行(年4回)Vol.4-4(通巻15号)

大阪市立東洋陶磁美術館

友の会通信

ASSOCIATES NEWS

No.15

編集 大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局

発行 〒530 大阪市北区中之島1-1-26 TEL. 06(223)0055

美術館の舞台裏 (12)

現在、シカゴ美術館『中国美術名品展』を開催中です。それにちなんで今回は、欧米の美術館の事情、とくに日本の美術館との相違について紹介しましょう。

欧米の代表的な美術館を訪ねると、一般の方にもすぐ目につくことがあります。たとえばレストランが充実していて、美術館へ食事のためだけに訪れる人も多いこと、図書室というより図書館といいつたいほど蔵書が豊富で、それが簡単に閲覧できること、ミュージアム・ショップの規模が大きく、内容もヴァライエティに富み、その売上金額は日本では想像もできないほど多額であること、入館無料の日があつて、そんな日はとくに混雑していることなどです。

ところが、一般の方の目に触れないいわば美術館の舞台裏でも大きく違っています。シカゴ美術館に例をとると、その一は美術品の修理部門を専門に持っていることです。陶磁や青銅器、石造物などはもちろんのこと、絵画についても印象派などの近現代絵画と古典絵画との二つの部門があります。古典絵画の修理室は、ガラス張りの天井を持つ立派なアトリエです。その二は写真部門のスタッフが揃っていることです。シカゴ展の図録の写真もすべてこの写真部所属の職員が撮影しました。部長以下9名のスタッフが撮影や保管に携っており、フィルムは見事に整理されています。日本でもごく限られた美術館に写真撮影のスタッフがいますが、その場合でもせいぜい一人で、彼我の相違はかなり大きいといわねばなりません。その三は美術館に梱包、解梱の専門部門があることです。今回の展覧会の梱包もその人たちが中心に行いました。その人たちが休む暇もなく作業に従事しているということは、それだけ館として美術品の貸し借りが多いということになります。ちなみにシカゴ美術館の東洋部が管理している美術品だけで35,000点あるということでした。その四は、美術館の職員はすべて写真入りのカードを胸につけています。外部の人と区別できないほどのスタッフがいるわけで、シカゴ美術館には職員録に記載されている人だけで500名以上数えることができます。スケールの大きさにかけては欧米の美術館との間にはかなりの差があることがおわかり頂けると思います。

大阪市立東洋陶磁美術館
館長 伊藤郁太郎

◆第12回講演会要旨◆

「シカゴ美術館の中国美術」

日 時：平成元年2月14日(火)
午後1時半～3時半
会 場：大阪弁護士会館・6階大会議室
講 師：シカゴ美術館 東洋美術部長 萩 豊氏
(文責 友の会事務局)

シカゴ美術館は、1866年にその母体が成立し、正式に設立しましたのは1879年です。現在の建物は、1892年に開かれたコロンビア博覧会の時に建設されたものです。この博覧会以後、シカゴの企業家の間では、東洋の美術品収集が盛んになり、現在の東洋部の収蔵品の中心をなすものも、後に寄贈されたそれらの収集品です。それは、三大コレクションといわれ、中国陶磁のタイソンコレクション、青銅器のバッキンガムコレクション、中国玉器のシンネンシャインコレクションです。

ラッセル・タイソンさんは、彼は生涯の大半を中国美術に注ぎ、全収集品を美術館に寄付されただけではなく、30年以上にもわたって館の運事を勤められました。バッキンガム・ファミリーは、まずお兄さんが浮世絵を集め、彼の死後2人の姉さんが浮世絵と青銅器の収集を引き継ぎ、その後コレクションの全てと彼らの全遺産と共に館に寄贈されましたので、現在でもそのおかげで我々は作品の購入ができるわけです。シンネンシャインさんの収集品も書斎ごと館に寄贈されています。玉というものは日本の皆様にはじみが薄いかもしれません、シカゴ美術館の玉器は、ハーバード大学のフォッグ美術館のウインスロップコレクションに継ぐ世界2番目の規模のものなのです。

今回は、1991年に新たにオープンする東洋ギャラリーの工事のため、現在ギャラリーを開鎖しておりますので、これらのすばらしい作品を日本の皆様に御覧頂けることになった次第です。

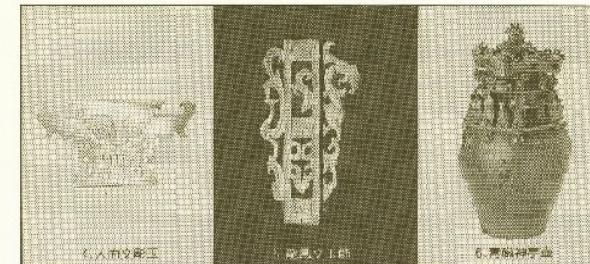
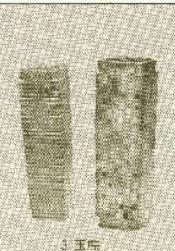
それではスライドを見ながら、作品に関しまして私なりの意見を話させてもらいます。(主なもののみ記載)

1. 饰饕餮文方彝 西周・紀元前10世紀 h. 32.8cm

これは現在、方彝と呼んでありますもので、すばらしい銅器であります。お酒を入れたと考えられます。殷の時代のものは、全体に四角いのですが、時代が下がると胴がこのように丸みをおびてきます。蓋の内側に「父乙」という人が作った」という意味の銘があります。根津美術館にも全く同じ物(h. 26.2cm)があり、こちらは重要文化財です。白鶴美術館にも同じ銘の作品があり、この父乙という人の作ったものはみなすばらしいものです。

2. 饰饕餮文方彝 殷・紀元前12~11世紀 h. 45.0cm

これもやはりお酒を入れた器。同様に根津美術館に似た作品(h. 50.9cm)があり、安陽から出土したと伝えられており、重要文化財となっています。蓋の中に蟬の形の銘があるのが珍しい。



最近安陽の婦好墓からほぼ似た方彝(h. 52.2cm)が出土しています。

3. 玉琮 新石器時代・紀元前3~2000年紀 h. 25.1cm, h. 26.7cm
これらは今まで東周や西周時代といわれてきたものですが、近年の発掘で新石器時代の良渚文化期に属することが明らかになつたものです。上海の近くのお墓の中から大量に出土した例があります。よく見て頂きますと、表面に顔が陰刻されており非常に特徴のある玉です。

4. 人面文彫玉 新石器時代・紀元前3~1000年紀 h. 4.4cm
非常に小さなマスクで、ペンダントのように使ったものでしょうか。日本はないものであります。ワシントンのスミソニアン美術館に彫品(w. 7.0cm)があります。少しあ風の異なるものが陝西省の禮固の西周墓から出土して閣額になっているのですが、こちらに關しては、龍山文化のものとみて良いと考えています。

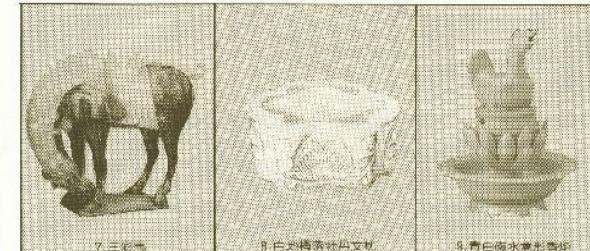
5. 雕鳳文玉飾 前漢・紀元前2世紀 l. 10.6cm
これも非常に珍しいもので何に使ったのかよく判りません。最近購入した作品です。両面から彫刻がされており、中央は中空になっていて、刀の鞘のような感じもします。最近、広東省の前漢の南越王墓からこれに近いもの(l. 14cm)が出土しています。広東から出たというだけで広東で作られたとは断言できませんし北方から輸入されたものではないかと思われます。

6. 青磁神寧壺 西晋・3世紀後半 h. 48.7cm
これも何に使ったのかはっきりしませんが、おもしろいものです。この手のものは200年から300年頃までの西晋の時代の約半世紀間しか作られています。よく見て頂きますと、道教の道人のかけに仏像がおかれています。これは、仏像という形として出てくるといへん早い例ではないかと思ひます。いくつか年代の判る類品が残っています、それらを総合して考えますと、この作品も290~292年頃としてよいのではないかと思ひます。

7. 三彩馬 唐・8世紀 h. 78.0cm
これがたいへん有名な馬です。頭をこのようにさげているものは他にはないのではないでしょうか。この毛並みや馬具の細工、また色彩的なバランス感覚のすばらしさ。いわゆる江戸馬、アラビア馬の今にも走り出さんとするかのような生き生きとした様子をよく表わしています。たいへん大きなものでもあり、おそらく上級クラスの人のお臺から出たものなのでしょう。

8. 白地搖落琺丹文枕 北宋・10世紀後半~11世紀前半 嵩州窯 h. 19.1cm

磁州窯は特に私の勉強した窯ですが、中でもこれは枕としても珍しい作品です。類品が大和文華館(w. 16.5cm)と、パリ



のギメ美術館(h. 11.0cm)にあります。この作品では特に象嵌部分が効果的です。こういう深彫りの破片が河南省登封窑から出ています。今まで磁州窯として総称していましたが、戦後中国の考古学的発掘がどんどん進み、このように個々の窯の姿が明らかになってきています。

9. 青白磁水禽形香炉 北宋・12世紀・景德鎮窯 h. 19.1cm

これは景德鎮の青白磁。このような厚い胎土が次の時代に染付が生まれてくる一の上にコバルトをつけて、焼成するという一基盤となつたのでしょう。その意味で大事な作品であるし、形態的にも貴重なものです。この中で香をたくと、口と横の穴からその煙がでてくる。その下には水に浮かぶ蓮花の造形。また釉溜りの青もとても美しい。すばらしいものです。

10. 粉彩紅牡丹文盤 明初・15世紀・景德鎮窯 d. 47.0cm

これは釉裏紅で、ご存じのように紅色を出すのを目的としているのですが、非常にむつかしく、なかなかうまくいきません。これがそのよい例ですけれど。こういう手のものは、從来は元時代のものといわれていたのですが、少し崩れた感じから、やはり明初・洪武期のものではないかと思ひます。

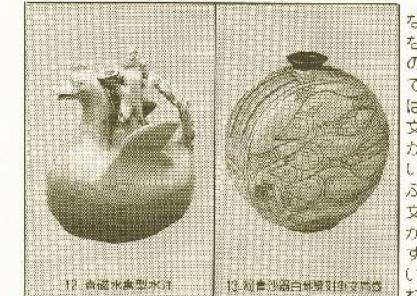
11. 豆彩竹文杯 清・雍正(1723~35)・景德鎮窯 h. 4.4cm

清朝の作品は1000点に近いコレクションがシカゴ美術館にあります。日本では余り親しみのないものです。これは本当に小さなものですが、雍正のペアのカップです。雍正年間は20年もなかつた短い時代でしたが、すばらしい陶磁器が作られています。これに似たものが静嘉堂文庫(h. 4.5cm)にあります。これは、染付で文様を描きこに淡い色をさす、豆彩とよばれるものです。

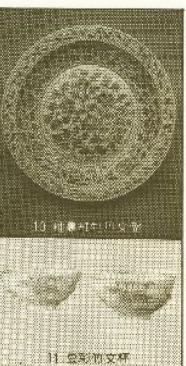
12. 青磁水禽形水注 高麗・12世紀 h. 21.4cm

数は少ないですが、朝鮮陶磁も持っていました。これは世界のどこにもない、色といい、形といい、どれをとっても珍品中の珍品です。人物もよくできているし、ハンドルの透彫も珍しい。大正10年頃に朝鮮半島で鉄道敷設工事がおこなわれ、それに伴い膨大な量の陶磁器がありました。タイソン氏はその時に100点ほどの朝鮮陶磁を買ったのですが、これもそのうちの一つです。

13. 粉青沙器白地線刻魚文扁壺 李朝・15世紀 h. 22.3cm



12. 青磁水禽形水注
13. 粉青沙器白地線刻魚文扁壺



プロフィール

蓑 豊 氏

1941年金沢市生まれ。慶應義塾大学文学部哲学科(美学専攻)卒業。ハーバード大学大学院博士課程修了。文学博士。ローヤルオンタリオ博物館、モントリオール美術館、インディアナボリス美術館勤務を経て、現在、シカゴ美術館東洋部長。主な著書は『Freedom of Clay and Brush through Seven Centuries in Northern China』ICE AND GREEN CLOUDS』Indianapolis Museum of Artなど。